

キルワ発言 つくられた部族「カレンジン」に巣くう内紛

著者	津田 みわ
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1996-09
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008459

キルワ発言

つくられた部族「カレンジン」に巣くう内紛

津田みわ

1 キルワ発言

1996年3月、第5次ケニア国会の開催から2日後、議事堂内である記者会見が行なわれた。会見の主は、大統領と同じリフト・バレー州出身で当選歴2回、弱冠36歳の与党議員K・キルワ。集まった記者たちは、彼が読み始めたステートメントにあとと驚いた。キルワは、大統領を名指して批判し始めたのである。

「わたしは、大統領には民主政治の『み』の字もないという結論に達した。大統領は、異なる見解をすべて脅威とみなし、なんとしてでも潰してしまわなければいけないものと捉えている。与党議員が大統領を公に批判するのは、1992年の複数政党制移行後はじめてのことである。

「大統領は私の選挙区において、陰謀をめぐらし、私に対する嫌悪キャンペーンを煽動してきた……。もし、私の選挙区、および県の与党リーダーとして私がふさわしくないと大統領が感じているのであれば、自ら公の場でそれを表明し、加えて、彼が考える良き指導者の必須条件を述べるのが有益であろう」。

翌日のDaily Nation紙（ケニアで最大発行部数を

誇る日刊紙）は一面トップでこれを報じ、キルワの読み上げたステートメントの全文を掲載した。

その中でキルワは、「なぜ大統領が自分を攻撃することに意味を見いだしているのか」と問題提起し、三つの回答を提示した。曰く、

「大統領の側近と大統領家の数人が、不正な取引にかかわっており、国益と正義の力の脅威を感じている」。

「大統領は『多数派恐怖症候群』をまったく克服していない。自分の属するコミュニティに数の上で勝るコミュニティにはかならず身の程を知らせねばならない、というのである」。

「大統領は、大統領職継承について、自分はカレンジン・コミュニティを1ブロックとして操作し、次の指導者を支持させることができる、という不可解な期待を抱いている。……しかし、われわれは売りに出された商品ではないのである」。

これらがなぜ大統領がキルワを攻撃しなければならない理由となるのか。この謎を解くカギは、キルワ発言には一度も言及されていない、キルワの属するナンディ（Nandi）という部族名である。

2 つくられたカレンジン部族

ケニア国勢調査においては、およそ40の集団が部族として扱われている。ただし、1969年、79年、89年とこれまで3次行なわれてきた調査のたびに、リストにあらわれる部族の名前も数も少しずつ変わってきた。これまで他の部族の一部としてしか名の現われなかったある集団が、部族に「昇格」したり、反対にこれまで独立の部族として扱われてきた集団が統合して新たな部族を形成したり、他部族に吸収されたりするのである。

1969年国勢調査まで、現大統領の出身部族はツゲン(Tugen)であり人口比にしてわずか1%の集団であった。しかし、79年国勢調査(現大統領就任の翌年に行なわれた)からは、カレンジン(Kalenjin)語系の諸集団はすべてカレンジンの名の下に統合され、統計上ひとつの部族として取り扱われることになった。大統領の属するツゲンも、キルワの属するナンディ(人口比約2%)もこれに含まれた。ここにおいて大統領出身「部族」は一躍人口比にして10%を超え、ケニア5大部族の仲間入りを果たしたのである。

この統合後、カレンジンが、言語を共有する以外に社会的・経済的になにか意味のある「集団」となり得たのか否かは定かでない。しかし、1992年の複数政党制選挙では、このカレンジン人が有権者の多数を構成する地域では、いずれも大統領と与党に圧倒的な支持が寄せられた。こと国政に関する限り、大統領出身「部族」は、現政権に忠誠を尽くす一枚岩の集団として、その期待された機能を果たしたのである。

3 二つの土地問題とカレンジン内サブ・グループ「ナンディ」

しかし、1992年の複数政党制選挙のあと、広大なカレンジン居住地域の一部で、土地購入をめぐる二つの問題が起こった。

ひとつ目の舞台はウアシン・ギシュ(Uasin Gishu)県であった。この県内の土地は、1979年以来カレンジン内サブ・グループとなったナンディの人々によって、広く「自分たちのもの」(すなわち「ナンディ人のもの」と信じられているといわれる。にもかかわらず、最近になって大量の土地がカレンジン内の他の二つのサブ・グループに売却され、それを批判した同県与党支部議長(ナンディ人)が停職処分に処せられる結果となった。

いまひとつの問題は、件のキルワ議員が住むトランス・ンゾイア(Trans Nzoia)県で起こった。最近になって、この県内の数多くの国有農地が分割され、大統領側近とその周辺に不正に分配された疑いが持ち上がったのである。偶然、といえるのかどうか、その大統領側近と大統領自身は、上述のウアシン・ギシュ県で大量の土地購入を許された二つのカレンジン内サブ・グループ——ツゲンとケイヨ(Keiyo)に属している。

「ナンディ人の土地」がツゲン人とケイヨ人に奪われつつある、というナンディ人有力政治家の認識が、この二つの土地転売を政治問題化させたといえる。これがひいては今回のキルワ発言に結びつくのである。

1969年国勢調査によれば、ナンディ人が主に居住するのはウアシン・ギシュ県、トランス・ンゾイア県、そしてナンディ県である。現在、統計上には住民の部族構成はカレンジンとしてしかあらわれないが、これら3県に住む「カレンジン」の

多数派はナンディ人である（ツゲンはいずれの県においても1%にはるかに満たない。ケイヨも同様であるが、わずかにウアシン・ギシユ県で16%を占めている）。そして近隣の土地を「カレンジン」ののではなく「ナンディ」のもののみならず、同じカレンジンでも他のサブ・グループによる土地取得を「よそのもの」の侵入とみなして激しい排斥運動を起こしたのである（もちろんケニアの法律は、すべてのケニア市民に、社会的帰属にかかわらず全国どここの土地を購入することも、居住することもできると保障しているのだが）。

キルワがそのステートメントの中で、大統領が自分を攻撃する理由の第1にあげた「大統領側近と大統領家の一部がかかわっている不正な取引」とは一部この問題を指している。

また、第2の理由でふれられている「大統領の属するコミュニティ」とは、カレンジンではなくツゲンを意味しているのであり、「身の程を知らせずにいられない」「数の上で勝るコミュニティ」とは、おなじくカレンジンと公称されるがツゲンとは一線を画するナンディを指しているのである（1969年国勢調査によればツゲン対ナンディの人口比は約1:2）。「身の程を知」らねばならないナンディ人は、国政の有力ポストをわずかにひとつ（大統領府州行政および治安担当）まかされたきり、しかも事務次官どまりである。一方、他のカレンジン内サブ・コミュニティ出身の政治家は、大統領に始まって、大統領官邸付き会計検査官、大統領府大臣、エネルギー大臣など、国政の要職に目白押しである。有力ポストが社会集団の人口比に見合っただけで配分されるべきか否かはともかく、「大統領を戴くカレンジンの一部でありながら、ナンディにはパイの切れ端しかまわしてもらえない」という不満は、ナンディ人有力政治家に多かれ少なかれ共有されているのである。

キルワは理由の第3で、大統領がカレンジン・

コミュニティを「1ブロックとして操作」できると考えるのは「不可解」と喝破した。それは、このつくられた「部族」であるカレンジン内に残る不溶分子、ナンディの存在とその尊厳を、高らかに訴えているからに他ならない。

4 発言のあとで来るもの

ナンディの事実上のスポークスマンとして、これまで「お願いにあがる」姿勢を何とか保ってきた与党議員キルワであったが、今回の記者会見で、彼はついに直訴状を携え大統領批判に打ってでた。一見、政治的自殺行為に見えるこの暴挙の裏には、しかし、「政治的にも身体的にも、殺される見込みは薄い」という巧妙な計算が働いている。

まだ一党制だった1989年に大統領を名指しで批判した当時のある与党閣僚は、自ら閣僚職を辞任したあと、続いて与党から追放処分到处せられた。一党制下では、与党からの追放は議席の喪失を意味する。無位の政治活動家となった元閣僚は、さらに逮捕され、劣悪な環境での長期にわたる拘留期間に二度の心臓発作に見舞われ死の危険に瀕した。

キルワはどうか。彼は会見で「いかなる結果をも恐れない」と述べたが、彼がこの元閣僚のような弾圧にあう可能性は、実際のところ、ゼロに近いといえる。なぜなら、1990年代の民主化の波の中で複数政党制化と野党の結成が果たされたいま、キルワには、たとえ与党を脱党しようとも野党議員として再選を果たす道がほぼ約束されているからである。まず、キルワの選挙区は有権者登録数約3万人のうち2万人近くが野党支持系の部族に属している（ちなみにキルワの選挙区が位置するトランス・ンゾイア県の三つの選挙区のうち、与党議員を選出したのはキルワの選挙区だけで、残りの2選挙区



ひとり気炎を上げるDaily Nation紙は、キルワ発言を報じた同日の政治漫画で、キルワを聖書に出てくるダビデに、大統領をゴリアテにととえた。巨人ゴリアテは、聖書のストーリーではダビデに殺されるが、はたして現実はいかに?……という含みである。

(1996年3月29日付)

は圧倒的多数で野党議員を選出している)。加えて、キルワに対するいかなる与党・政府による処分も、キルワに「ナンディ人殉教者」の称号を与えかねない。キルワが野党に移籍し、補欠選挙に立候補した暁には、容易にナンディ人を動員できるだけでなく、ナンディ人以外の有権者の支持をも集めて圧倒的得票数で再選される可能性が高いのである。

たった1人の政治家、キルワの取り扱い如何によつては、ナンディ全体が政治的に意味ある集団として浮かび上がりかねない。そのような事態は、せつかくつくったカレンジン「部族」の今後にとってきわめて有害である。すでにキルワ発言のあと、新聞・雑誌紙上で、ナイロビの街角で、ツゲンという小さな集団名が大統領の出身集団として何度言及されたことか。

1990年代になって、部族抗争の調停のための長老会議が「カマツサ (KAMATUSA: 四つの部族カレンジン、マサイ、トゥルカナ、サンプル[いずれもナイロート語系遊牧民で、1992年選挙では圧倒的に与党を

支持した)をあわせて呼ぶ俗称)会議」と命名された。名称を得たことにより、政治の場面では、大統領とその側近を支持する拡大部族カマツサ(あわせればケニア人口の15%に達する。2割を占めるキクユに続き、一躍第2位の座におどりでる!)がここ数年でしだいに意味ある集団として定着しつつある。

ツゲンからカレンジンを経てカマツサへ。名称の獲得とともに膨張を続ける大統領支持母体、その中核をなすはずのカレンジンが、ナンディやツゲンのレベルに分解されて取りざたされるような事態は大統領とその側近にとってなんとしても避けたいところであろう。

複数政党制移行後第2回の大統領選挙・国会議員選挙は、もう目前に迫っている。選挙は、言うまでもなく数の勝負である。大統領とその側近が、今後どのようにキルワを表舞台から「平和裡に」取り除き、そして同時に、ナンディをカレンジンあるいはカマツサの静かな一構成員として溶解させていくのか。彼らにとってはまさに「手腕の見せどころ」であろう。

(つだ・みわ/在ケニア海外派遣員)